

ゼロカーボンビレッジいいたて

ゼロカーボンシティは、『脱炭素都市』と訳されます。環境省においては、「2050年までに二酸化炭素排出量を実質ゼロにする」と宣言した自治体を「ゼロカーボンシティ」と定義しています。

飯館村は、令和4年3月14日に、「ゼロカーボンビレッジいいたて」を宣言しました。再生可能エネルギーの活用や、森林再生の事業などを通して、温室効果ガスの一つ、二酸化炭素の排出量削減を推進しています。

また、令和5年度に、「ゼロカーボンビレッジいいたて実行計画」を策定しました。実行計画では、現状を分析し、目標達成のための取り組みを例示。推進体制や進捗の評価方法についても記載しています。

国は、2050年までに目標を達成するには、2030年までが重要な期間であると位置付けていて、各地方自治体が、地域の特徴に合わせた実行計画をそれぞれに策定しています。

バイオマス発電施設「飯館みらい発電所」の竣工に合わせて、飯館村の最新の取り組みを紹介し、暮らしの中のゼロカーボンについてもお伝えします。

地球温暖化による急速な気候変動は世界の課題であると同時に、一人ひとりの問題でもあります。できることから一つずつ。

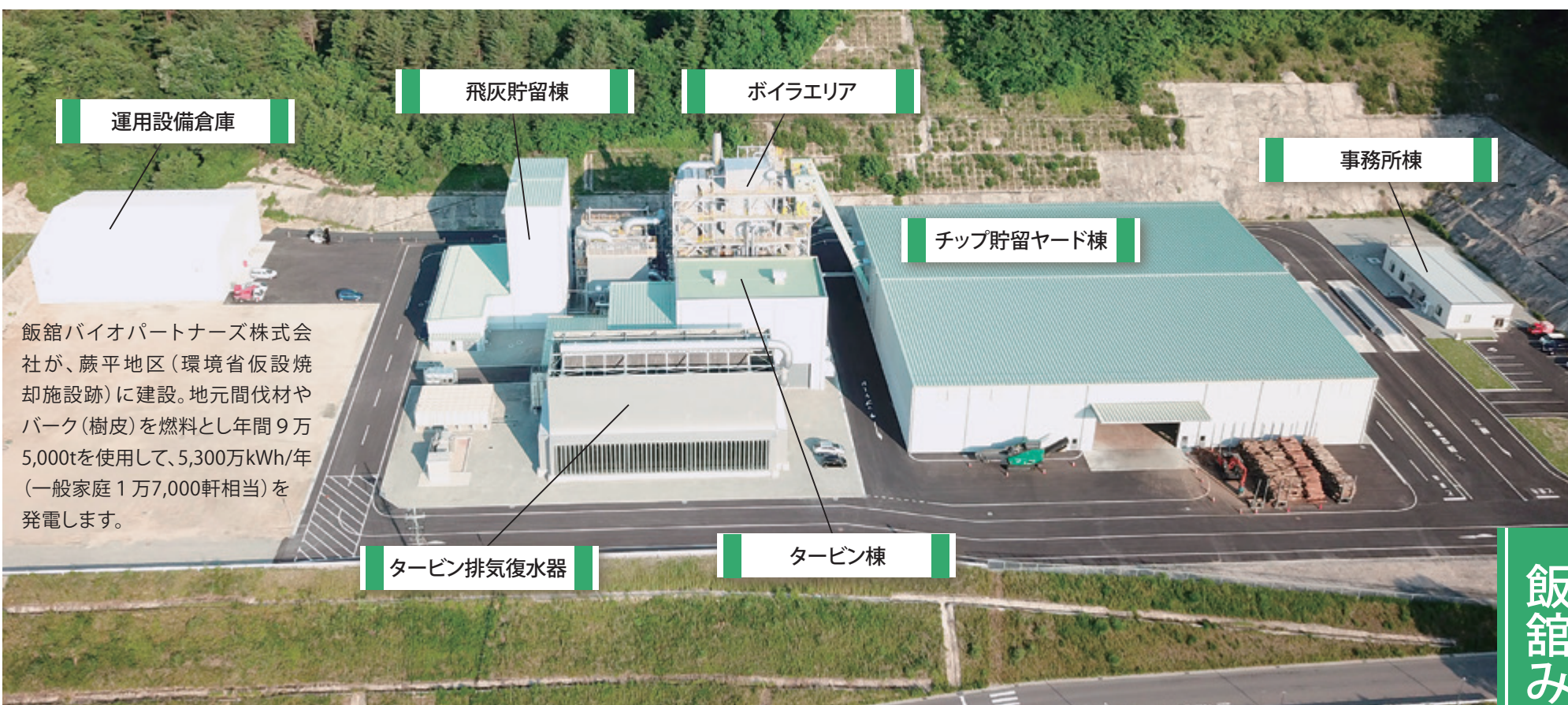
飯館村は、地域に活力を与え、暮らしを豊かにする視点を持って、地球温暖化対策に取り組んでいます。

『ゼロカーボン』のカーボンとは炭素のことで、『ゼロカーボン』は「脱炭素」と訳されます。『ゼロカーボン』は「二酸化炭素の排出量を実質的にゼロにする」という意味で、『カーボンニュートラル』は「二酸化炭素の“排出量”と“吸収・除去量”がつり合っている」という意味です。『ゼロカーボンシティ』も、プラスマイナスゼロの『カーボンニュートラル』の状態を目指します。

二酸化炭素(CO2)は動物の呼吸や有機物が燃えることで空気中に排出され、植物の光合成によって消費されています。

飯館みらい発電所

「飯館みらい発電所」は、原発事故の影響で利活用が停滞していた間伐材やバーク(樹皮)を使用してバイオマス発電を行い、地域の里山再生、福島県内の林業振興に貢献します。6月30日に竣工式が行われ、現在は、7月中の本格稼働を目指して試験運転を行っています。



①チップ貯留ヤード棟。手前の色の濃い材がバークで右奥がチップ。②チップとバークを混ぜたブレンド材をコンベアに投入。③ブレンド材を燃やすボイラエリア。④原木(丸太)を加工するスウェーデン製の破砕機。運転席がなく、リモコン操作で動きます。⑤チップとバークは1日に10トラック約30台分を中通りや浜通りから搬入。村産の原木は貯木場から運搬します。

繊維質の多いバークを他の発電施設よりも多く使用する計画で、適切な運転ができるよう試験を行っています。

木質燃料は浜通り中通りのものを使用しています。放射性物質が付着した燃料焼却後の飛灰は、外部に漏らさないようバグフィルタで確実に捕集しています。また、放射線管理者が常駐して施設内外の環境モニタリングを行い、安全な運転を継続していきます。今年2月には周辺自治体にも参加をいただき、地域協議会が立ち上げられ、発電所の運転状況などを定期的に報告しています。

原木は、飯館村森林組合から安定的に供給していただいています。また、業務の一部を担う佐藤総業では、飯館村出身の方が4人勤務しています。

セブンイレブンまでい館店の移動販売車を利用したり、地域おこし協力隊の横山梨沙さんにケータリングをお願いしたり、これからのいろいろな形で村の皆さんと触れ合いながら、仕事をしていきたいと考えています。

木質バイオマス発電事業がスタートします

公募で選ばれた「飯館バイオパートナーズ株式会社」が事業主体です。

飯館バイオパートナーズ
部長 小貫勝彦さん